

上田秋成の記紀神話観についての一考察

北京外国語大学・日本学研究センター 学生

肖悦

記紀神話は、成立当時から人々の関心を引いている。記紀完成後に朝廷で開かれた日本紀講筈から、現在書店で並べる様々な記紀神話の研究書まで、数多くの人は記紀神話を研究し、注釈をつけた。この連綿と続く記紀神話の解釈史は、日本思想研究に見逃すことができないものであろう。

後世の人々による記紀神話への注解の中で、近世に形成された注解書は数量においても思想の特質においても目立つものである。近世には、日本の整版技術の発展につれ、記紀は自由に読めるようになり、記紀神話の研究も盛んになった。それに、朱子学、国学、洋学など多様な思想が近世に開花し発展したので、多様な記紀神話観も生成した。

近世における記紀神話の研究は本居宣長一脈の記紀神話観に偏ってきたことを考慮して、そこから取り落とされてきた反対者の例——上田秋成に注目したい。18 世紀後半に本居宣長と上田秋成の間で展開された「日の神論争」は有名な神話論争である。「日の神論争」で、秋成は洋学知識（世界地図）の応用や合理的な思考により、宣長の文献絶対主義を強く批判し、よく「近代的」と評される。それから、「近代的」と評される秋成は県門の流れを汲んだ国学者でもあり、記紀神話の俗解本「神代かたり」まで書いた。さらに、明代の文言小説の影響を受けた『雨月物語』の作者として世に知られている上田秋成は、漢学を渉猟したに間違いない。

このような洋学、国学、漢学も学んだ秋成は、どのような記紀神話観が生成したのか。漢学、洋学の外来文化と国学は秋成の記紀神話観にどのように融合した、またはぶつかり合ったのかは興味深い問題であろう。それを明らかにするために、本論文は秋成の「神代かたり」という記紀神話の俗解本への読解を中心に、上田秋成の記紀神話観を考察しようとする。